関西自然保護機構会報（18）1－2，1989

巻頭言

# 自然保護と危険察知能力

小川房人
（大阪市立大学理学部・大阪市立自然史博物館）

今から20年以上前，大阪市立大学新聞にのった吉良竜夫教授（現在滋賀県琵琶湖研究所長）の記事を読んで，目がくらむほどの衝撃をうけた事を，今でも鮮明に覚えている。その記事の内容はつぎのようなものであった。

生物の生活様式の進化は，ひとえに体制の進化に伴うものであった。しかし，すべての生物のうちでヒトだけは、道具を使うという他の動物とたったひとつの能力の違いにより，体制の進化なしに生活様式を進化させうる動物となった。このため人間の生活様式は，体制の変化なしに，時々刻々進化の道をたどってきた。しかし一方、体制は全く進化していないため，食物連鎖や環境適応能力など，ヒトの発生時と全く同じ動物的生存条件が充される必要がある。このため，進化した生活様式ともとのままの体制との間に，しばしば矛循が生じるようになった。

吉良教授のこの記事は，生活様式の進化と体制の進化の乖離が，人間活動と公害の宿命的因縁であることを明確に指摘している。またこの指摘は，ヒトの動物的体制の健全な維持を考えると，いかなる開発においても，ヒトの発生時に存在した自然生態系の本来の機能を低下させない程度の開発，あるいは低下させない方法による開発でなければならない理由も明確にしている。

すなわちこの指摘は，環境の保全・改変，自然の保護・開発のいずれを考える時にも，常に原点とすべき指摘である。

最近，一時ひかえめであった開発志向が，ふたたび強まってきている。しかも，最近の開発志向の意見には，かつての開発志向の時代より，より困った傾向が潜在しているのではないかと危惧している。

その危惧は，日本人の危険察知能力の減退という傾向である。

現在，日本人の多くは，野性の場における危険察知能力をほとんど完全に失っているように見える。このため，開発の利点は理解できても，開発がもたらす危険には全く気がつかないのではないだろうか。

危険は，理論的に予測できるとはかぎらない。理論的に予測できる危険は防止策を立てることもできる。論理的に予測できない危険こそ本当の危険である。このような論理的に予測できない危険，すなわち本当の危険を知るためには，察知する以外にない。したがって，危険察知能力こそが，危険を知り，危険を避けるために必要不可欠な能力である。

危険察知能力に欠ける人がいくら危険を認められないと云っても，危険が本当に存在しないと信じるわけにはいかない。存在する危険がわからないに過ぎない場合が多い。したがって，危険察知能力に欠ける人の安全論議は，無意味であるだけでなく，有害でさえある。現在の知識で論理的に把握できない，あるいは予測できない危険が存在しても，その存在は否定され，予測しえない危険発生の重大原因となる。

察知能力とは，論理的追求で物事を知る能力ではない。何故そう感じるのかわからないが，とにかく「おかしい」，「変だ」，「危ない」というような事を感覚的・直観的に感じる能力である。

論理的追求はその後に続くものである。理由なしにとにかく感じた「おかしい」,「危ない」という感覚に対して,「本当におかしいのか」,「本当に危ないのか」,「何がおかしいのか」,「何が危ないのか」,「どのようにおかしいのか」,「どのように危ないのか」を追求するのが論理の世界である。

論理に先んじたこのような察知能力は,一見非科学的なように思える。しかし,科学の世界でも,現実に或る現象や事柄に直面した時,「あ!これは全く新しい事柄だ」,「これは今までに知られていなかった事柄だ」という事を感知できる能力は極めて重要である。この能力がなければ,せっかく新らしい事実・現象に直面しても,既成の知識・理論の中に埋設してしまい,科学を歪曲することにもなりかねない。

現在,文明の発達,文物・制度の整備とともに,日常の生活での危険は大巾に減少してきた。人間生活における安全性の増大は大変よろこばしいことである。

しかし,この安全性の増大は,一方では危険に対する感知能力を大巾に減退させている。

かつての開発志向の時代には,それは強引ではあるが,危険承知での関発志向であり,危険覚悟での開発であった。保護派は,開発派のその強引さにたじたじであった。しかし開発派も危険は承知しており,保護派と開発派で危険論争ができた。

これに対し、現在の新らしい開発派には,危険の存在の感知能力が欠けているように思える。したがって,開発を考える時,その利点だけから考え,それに伴う危険は全く無視されているように思える。このため,危険の存在の有無の検討,論争さえ無視されるようになってきている。

これが上に述べた新らしい危惧である。

人間の生活の向上のためには,いつの場合でも開発は悪であるとはいえない。必要不可欠ともいえる。

しかし,上に述べた吉良教授の指摘のように,人間の生活様式の進化のための開発は,進化しないヒトの体制の健全な維持に背反するという宿命的関係をもつ。それを避けるためには,常に開発に伴う危険を察知する必要がある。

危険察知能力に欠けた安全論議は厳に慎しむべきである。